九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

初唐歴史家の文學思想 : 太宗期編纂の前代史文苑傳序を中心に

古川, 末喜
鹿児島県立短期大学 : 講師

https://doi.org/10.15017/9771

出版情報：中国文学論集. 9, pp.9-29, 1980-11-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

初唐歷史家の文學思想

——太宗期編纂の前代史文苑傳序を中心に——

古川末喜

序

この論稿は小生の隋唐文學思想史構想の一環をなすものである。中國中世文學思想史上における七世紀から八世紀にかけての時代は、六朝の主情主義的修辭主義的文學思想の時代から、盛・中唐の儒家的復古的文學思想の時代へと移行する大きな價値の轉換期であった。しかしながら、もし我々がこの時代を單なる「過渡期」という把握で濟まそうとするならば、それはあまりにも安直であろう。というのも、とりわけ南北朝を政治的に統一した隋から唐初にかけての時期は、南朝から流入してきた主情主義的修辭主義的文學論と、北朝を經由してきた隋唐支配集團の儒家的文學論とが、歷史上はじめて遭遇し、この異質な二種の文學思想が互いに葛藤し、入り亂れた複雜な時代であったからである。

こうした中で、唐王朝創建後まもなく、次つぎと編纂された前代史の文苑傳、文學傳の序や論のなかに當時の史官たちが論述した文學への言及は、上述のごとき時代の諸相を我々に遺憾なく示すものとして興味深いものがある

だけでなく、隋唐文學思想史を考察するうえで見落とすことのできないものである。すなわち、『晉書』文苑傳序・文苑傳史臣論、『梁書』文學傳序、『陳書』文學傳序・文學傳史臣論、『北齊書』文苑傳序、『周書』王褒庾信傳論、『隋書』文學傳序・文學傳史臣論がそれである。(1)

たしかに從來の文學批評史の論著は、この歷史家たちの文學への發言をしばしば取り上げてはいるが、その殆どは隋唐文學思想史上で、盛・中唐の古詩・古文運動を準備するものと位置づけるものであった。しかし、この位置づけは、大局的には大きな誤りはないものの、なお少なからず正確さを欠くと言わねばならない。なぜならば、從來の批評史の論斷は、かかる歷史家の發言が、六朝文學論とは斷絕し、盛・中唐の文學論とは連續するという不動の前提のもとに、修辭主義的主情主義的な六朝文學論との對立面を强調する一方、盛・中唐の古詩・古文運動につながる文學思想の萌芽を檢出する操作に終始するものでしかなく、時代の轉換期に在る者の有する錯綜した複雜な性格を見失っていたからである。

本稿は、從來の批評史の論著に欠落していたかかる六朝文學論との連續面に視座をすえ、歷史家の文學論の性格をできうる限り實態に卽して明らかにしてみようとするのがそのねらいである。あわせて、その文學思想史的意義についても考察を加えてみるつもりである。(2)

一

『晉書』文苑傳序(3)には、六朝の文學論の著作を多くふまえている事實を指摘できる。『晉書』は文の功用を顯彰

して、「文之時義、大哉遠矣」という。「文之時義、大矣哉」という表現は、『易』彖傳に頻出する。例えば「(豫、遯、姤、旅)の時義大なるかな矣哉」など。『晉書』はもちろん、これらを意識していよう。しかし、梁の昭明太子の「文選序」には「文之時義、遠矣哉」とあり、『晉書』がわざわざ「大哉遠矣」と重ねて表現したのは、明らかに直接「文選序」を踏まえたからであった。ちなみにこの『晉書』の「文」觀念は、かざるという義であり、それは「文選序」や『文心雕龍』等の六朝的「文」觀念を踏襲している。

つづく文學史の叙述部分で、『晉書』は、沈約の『宋書』謝靈運傳論の「(A)周室既衰、風流爾著……(B)屈平宋玉、導清源於前……(C)自茲以降……異軌同奔」を下じきに、「(a)洎姬曆(周)云季、歌頌滋繁……(b)荀宋之流、導源自遠……(c)自時已降、軌躅同趨」と述べる。また、北齊の魏收の『魏書』文苑傳序の「漢之西京、馬・揚爲首稱、東都之下、班・張爲雄伯」の表現をかりて、「西都賈・馬……東漢班・張……俱標稱首、咸推雄伯」ともする。さらに「言泉會於九流」や「彬蔚之美、競爽當年」は、陸機の『文賦』を出典にする。文苑傳卷末の「史臣論」においても、「情之所適、發乎詠歌、而感召無象、風律殊制」の「感召無象」は、梁の蕭子顯の『南齊書』文學傳論の「屬文之道、事出神思、感召無象、變化不窮」をそのまま踏襲する。

このように、「文」觀念や六朝文學論の著作を多くふまえる叙述等から、『晉書』には六朝文學論との密接な關係を指摘することができるが、これは初唐の劉知幾が「務めて多く美を爲す」(『史通』卷五「採撰」)と批評するように、實際編纂に携わった史官が「多くは文詠の士」で「評論する所は競いて綺豔を爲」(『舊唐書』卷六六 房玄齡傳)したことと無緣ではあるまい。

二

『陳書』文學傳序の冒頭で、撰者の姚思廉は、文學とは何かについて次のように言う。

楚・漢自り以降、辭人世々に出で、洛汭・江左に、其の流れは彌いよ暢たりて、思いは造化と侔しく、明なることは日月と竝ばざるは莫し。大なるは則ち憲章・典謨、王道を裨贊す。小なるは則ち文理清正、性靈を申紓す。

ここで注意すべき點は、姚思廉が「楚辭」「漢賦」以降、梁まで發展してきた文學を二つの機能に分けていることである。一つは、「憲章・典謨であって、王道を裨い贊ける」ことであり、これは隋の顔之推の『顔氏家訓』に「朝廷の憲章、軍旅の制誥は、仁義を敷顯し、功德を發明し、牧民建國し、施用は多途なり」（文章篇）と言うのに近い。要するに文學の大なる機能とは、國家の憲章・法規や古聖賢哲の訓誡が教化や國政に功用する働きを言うのである。

他の一つは、「表現と内容が清正であって、性靈を申紓する」機能である。「性靈」の語は、『陳書』以前に『文心雕龍』や『詩品』等に數例みえ、その中でも『文心雕龍』情采篇で「乃の性靈を綜述し、器象を敷寫するが若きは、心を鳥迹の中に鏤め、辭を魚網の上に織る」という時の「性靈」、『顔氏家訓』文章篇の「其の文章の體を積む所を原ぬれば、興會を標擧し、性靈を發引し……」の「性靈」に近く、より個人的な情感・精神の義と考えられる。(4) すなわち「申紓性靈」とは、心のうちにあるより個人的な情感・精神を發揚するの義である。

とすれば、『陳書』の「文學の小なる機能は性靈を申紓する」という發想は、陸機の「文賦」の緣情說、鍾嶸の『詩品』序の情性吟詠說以來の南朝の主情主義的文學論の立場に立つと言えよう。

文學を機能面から、このように大小二つに分ける考え方は從來にはない。もちろん、これは南朝に盛行した、例えば宋の顏延之の『庭誥』や梁の蕭繹の『金樓子』立言篇等の文體論、文筆論などとも異なり、『陳書』獨特のものである。『陳書』がこのように文學を二分した意義は、政敎にかかわる大なる文學から區別して、個人的な抒情的文藝の立場をより明確にうちだすことにあったと思われる。これは、例えば『陳書』とよく似た表現をする前揭の『顏氏家訓』文章篇と比べるとより明瞭である。『顏氏家訓』は、詔命策檄、歌詠賦頌、祭祀哀誄、書奏箴銘等のすべての文章を、「朝廷の憲章や軍旅の制誥や、仁義を敷顯したりする施用の多途な」文章と、「性靈を陶冶し、諷諫を從容する」文章との二つに分ける。そしてその前者が、『陳書』の大なる文學に、後者が小なる文學にそれぞれ對應する。しかし、『顏氏家訓』の後者の「陶冶性靈、從容諷諫」の文章は、人格や魂を陶冶し、諷諫をすすめるというように、未だ道德主義的で政敎において功利主義的であるが、『陳書』の小なる文學の「申紓性靈」は、前述のように純粹に主情主義的なのである。『陳書』には『顏氏家訓』を踏まえたと思えるふしがあるが、かかる點で、より旗幟鮮明な主情的文學論の主張をもつと言えよう。

三

李百藥の『北齊書』文苑傳序でまず注目すべきものは、次に引用する詩文發生論である。

文の起こる所は、情、中に發す。人、六情有りて、五常の秀を稟く。情は六氣に感じ、四時の序に順う。

中國中世における詩文發生の理論の最も代表的なものには、〈心情→詩文〉の二段階と、〈事物→心情→詩文〉の三段階の二つの説明方式がある。後者は客觀的實在物（主に自然の景物など人事も含む）が、人間の心に、ある種の心的緊張狀態を作り出し、その內的な心的運動が、言葉という表現形式を以て實現したのが詩文であるという説明である。謂わば、初めに物ありきである。前者は、〈事物→心情〉の過程がなく、まず內發する心があり、それが言語という媒體を以て表現されたのが詩文であるという説明であり、謂わば、初めに心ありきである。(5) こうした觀點に立つと、「文之所起、情發於中」は〈心情→詩文〉の過程を、「情感六氣、順四時之序」は後述のように〈事物→心情〉の過程をそれぞれ説明したものとなり、『北齊書』の詩文發生論は、〈事物→心情→詩文〉の三段階方式であることがわかる。

〈心情→詩文〉〈事物→心情→詩文〉の詩文發生の理論は、既に先秦から漢の時代にかけて儒家によって創案されていた。後者には、例えば『禮記』樂記篇の「凡そ音（民謠）の起こるは、人心由り生ずるなり。人心の動くは、物、之をして然らしむるなり。物に感じて動く、故に聲に形（あらわ）る」、さらに「凡そ音は、人心に生ずる者なり。情、中に動く、故に聲に形る、聲、文を成す、之を音と謂う」があり、「人心之動、物使之然也。感於物而動」は〈事物→心情〉を、「情動於中、故形於聲、聲成文、謂之音」は〈心情→詩文〉をそれぞれ説明したものである。後漢の班固の『漢書藝文志』詩賦略論の「物に感じて端を造る」も、〈事物→心情〉の過程を説明したものである。二段階方式には、右の『禮記』を部分的に取り入れた「毛詩大序」の「詩は志の之く所なり。心に在るを志と

爲し、言に發するを詩と爲す。情、中に動きて、言に形る」がある。これは〈事物→心情〉の過程がなく、直接に〈心情→詩文〉である。

詩文發生の理論は、ほぼ漢代までは、このように〈心情→詩文〉〈事物→心情→詩文〉の單純な說明にすぎなかったが、つづく南朝に至ると、唯美文藝の發展に對應して深化し具體化した。それは、(A)〈事物〉が〈心情〉を動かす場合の〈事物〉の側のメカニズムと、(B)外物からの刺激を受け入れ心的緊張狀態を造りだす受容體側のメカニズム、或いは內發する〈心情〉の主體側のメカニズムの、〈事物〉と〈心情〉との二つの方向で深化した。例えば左に引用する西晉の陸機の「文賦」は、この理論を深化させた最初のものであろう。

遵四時以歎逝、瞻萬物而思紛、
悲落葉於勁秋、喜柔條於芳春。

この「四時」「萬物」「勁秋の落葉」「芳春の柔條」は、漢代ごろまでは〈事物〉としか表現されなかったものを(A)の方面で、「喜」「悲」「歎逝」「思紛」は、漢代ごろまでの〈心情〉を(B)の方面で具體化したものである。(5)

さらに(A)の外物側のメカニズムを深化させたものには、梁の鍾嶸の『詩品』序の、

若乃春風・春鳥・秋月・秋蟬・夏雲・夏雨・冬月・祁寒、斯四候之感諸詩者也。

の一節がある。この「春風」「春鳥」等は、いずれも〈事物〉を具體化したものであり、また、

氣之動物、物之感人。故搖蕩性情、形諸舞詠。

は、漢代ごろまでの〈事物→心情〉を、〈氣→事物→心情〉と一步深化させたものである。(6)『文心雕龍』物色篇に

も、

春秋代序、陰陽慘舒。物色之動、心亦搖焉。……四時之動物、深矣。……是以獻歲發春、悦豫之情暢。滔滔孟夏、鬱陶之心凝。天高氣清、陰沈之志遠。霰雪無垠、矜肅之慮深。歲有其物、物有其容。情以物遷、辭以情發。

の一節があり、この「春秋は代序し、陰陽は慘舒す」「四時」「歲を獻め春を發す」「滔滔たる孟夏」「天高く氣清む」「霰雪垠無し」等の「歲それぞれにある物」「物それぞれにある容」は、全て〈事物→心情〉の〈事物〉を具體化したものである。實は『北齊書』の「情は六氣に感じ、四時の序に順う」は、上述のような六朝文學論が深化し具體化した同一線上での發言だったのである。

次に(B)の〈心情〉の方面で深化させたものには、右の『文心雕龍』物色篇の、「悦豫の情」「鬱陶の心」「陰沈の心」「矜肅の慮」等がある。同じく明詩篇の「人は七情を稟け、物に應じて斯に感じ、物に感じて志を吟ず」は、受容體側のメカニズムを複雜化したものである。また左の沈約の『宋書』謝靈運傳論は、二段階の詩文發生論を說いたものであり、

民稟天地之靈、含五常之德、剛柔迭用、喜慍分情。夫志動於中、則詠歌外發。

この「民は天地の靈を稟け、五常の德を含み、剛柔、用を迭え、喜慍情を分く」は、その內發する心の側を複雜化したものである。『北齊書』の「人は六情有りて、五常の秀を稟く」というのは、實はこうした『宋書』謝靈運傳論や『文心雕龍』等を踏まえての發言だったのである。(7)

以上のように先秦から漢代にかけて創案された〈心情→詩文〉〈事物→心情→詩文〉の詩文發生の理論は、六朝期に至ると種々に深化、具體化されていくが、そこには定説というものは存在せず、各人各様の説が通行していたといえる。『北齊書』の詩文發生論は、こうした中で、基本的にはそれらの高度な理論に依據しながらも、獨自の説を開陳したものだったのである。

『北齊書』は、詩文發生論につづけて創作論を述べる。左はその前半であるが、そこではまず創作におけるインスピレーションの問題について説く。

> 其れ帝が懸解を資け、天が多能を縱にし、黼黻を生知に摛き、珪璋を先覺に問える有り。譬へば雕雲の自から五色を成し、猶ほ儀鳳の八音を冥會するがごとし。斯れ固より英靈を感じて以て特達するものにして、勞心の能く致す所に非ざるなり。

形式美と音律美を兼ね備えた文章は、英靈を感じて特達したのであり、決して勞心がなしたのではないと述べるように、『北齊書』は、意識的な創作努力（勞心）に對して、文學創造における天與のインスピレーション（英靈）を第一義的なものとし、その重要性をここで強調している。文學理論史上でインスピレーションの問題を取りあげたのは、「文賦」のみであり、以後は『北齊書』以外にはない。しかし「文賦」は、『北齊書』のように英靈と勞心とによる二様の創作を對置し、一方を第一義的とするような價値決定は行なわず、自己の創作體驗に本づくインスピレーションの働きを經驗主義的に述べるにすぎない。

インスピレーションが涸渇し、文學創造力としての思想・感情の精神活動が停滯した場合はどうするか。『北齊

書』は次に、「縦い斯れ情思の底滯し、關鍵の通じざる」時でも、として、左のような打開策を提示する。

但だ伏膺して怠る無く、鑽仰するを斯れ切にし、勝流を馳騖し、益友を周旋し、學に強めて其の聞見を廣め、心を專らにして、涉求を屏ふ、……

すなわち經驗を豊かにし、知識を積み重ね、努力し學習することによっても、「畫繢は飾るに丹青を以てし、雕琢は其の器用を成す」ような美しい文章を作ることができるとするのである。そして、「學びて之を知るも、猶お己を賢とするに足るなり」として、文學創造の精神的活動が停滯した際の、學習の重要な意義を強調するのである。この點、『北齊書』が下敷きにした「文賦」はやや異なる。「文賦」は同じく、「六情、底滯し、志往き、神留まるに及ん」だ場合は、「余が力の勠（努力）しうる所に非ず」として、その打開策を放棄し、「吾は未だその開と塞の由る所を識らず」と、逆に疑問を投げかけるだけである。

その精神活動の停滯狀況に際して、種々の打開策を講ずるのは『文心雕龍』である。養氣篇で劉勰は、散歩や談笑によって心身をリラックスさせ、創作活動の基本たる精神にゆとりを持たせるようすすめる。神思篇では、文學的創造能力には先天的な格差があるとしつつも、それは四體と精神とを調節して虛靜を保ち、學習を積み、才能を豊かにすることによって向上させることができるとする。このように、劉勰も既に文學的創造能力の涵養に、學問を積み知識をたくわえることの重要性を説くが（他に體性篇、事類篇など）、六朝期にはこれは一般的通念であった。『北齊書』も『文心雕龍』に代表されるこうした論調を受け繼いでいるのである。しかし、『文心雕龍』は學習以外にも種々の手段を講じ、その中でもとりわけ虛靜を保つという精神的修養を最も重視するが、『北齊書』は、た

だ學習と經驗の積み重ねを提起するにすぎない。

文學創造能力の涵養法につづけて『北齊書』は次のように言う。

> 石を謂いて獸と爲し、之を射て洞開するは、精の至なり。積歲に牛を解き、恢然と刃を游ばすは、習の久しきなり。渾沌が鑿る可きの姿無く、窮奇が移らざるの情を懷うに非ざる自りは、安ぞ至精、久習にして成功せざる者有らんや。善きかな魏文の著論や、「人は強力めざること多し。貧賤なれば則ち饑寒に懾れ、富貴なれば則ち逸樂に流る。遂くて目前の務めを營み、千載の功を遺る。日月は上に逝き、體貌は下に衰え、忽然として萬物と與に遷化す。斯れ志士の大痛なり」と。

もちろん、『北齊書』は文學的創造力に關して、前述したようにインスピレーション（英靈）を第一義的なものとするが、ここで『北齊書』がより力點を置くのは、費やす言葉數や論調からしても「勞心」した學習、努力による創作である。この『北齊書』自身の中での、インスピレーションによる創作を第一義としつつも、學習、努力による創作をより强調しようとする微妙な立場は、文學創造力涵養法において、精神修養面を重視する『文心彫龍』に比し、學習、經驗面を重視した立場と根底で通じあう。同じく文學創造力涵養法とはいえ、虛靜を保つという精神主義的要素が拂拭され、學習・努力という實際的で後天的獲得に有利な側面が强調され始めた所に、文學的思想的に高度に洗練された六朝貴族的な傾向から、文化水準のやや落ちる成り上り者的な、隋唐國家成立期の新興支配集團にふさわしい形態への變化のあとを見ることができるのである。

四

『周書』文學傳には序論はないが、ちょうど沈約の『宋書』謝靈運傳論の體裁にも似た王褒庾信傳論（卷四一）がある。(8)それにいう。

文章の作りを原ぬれば、情性に本づく。思いを覃くせば、則ち變化は方無し。言に形せば、則ち條流は遂く廣し。

この部分は、實は梁の蕭子顯の『南齊書』文學傳論をふまえていることが想定される。『周書』の詩文發生論は、「原文章之作、本乎情性」と述べるように、〈心情→詩文〉の二段階方式である。『南齊書』も、「文章者、蓋情性之風標、神明之律呂也」と述べ、〈心情→詩文〉の發生論である。兩者は表現は異なるものの、詩文發生論に關しては全く共通する。

前句の「覃思、則變化無方」は、「文賦」が「精は八極にはせ、心は萬仞にあそぶ」というのに同じで、文學的想像力が自由奔放にかけめぐるさまを述べたものである。これは、『南齊書』の「屬文の道は、事は神思に出で、感召は無象、變化は不窮」に對應し、「覃思」は『南齊書』の「蘊思」を、「變化無方」は「感召無象、變化不窮」をそれぞれふまえる。後句の「形言、則條流遂廣」は、驅けめぐる想象力を言葉に表現すれば、様々な文學ジャンルに分かれることを述べたものであり、『南齊書』の「五聲の音響を俱にするも、言に出だせば句を異にし、萬物の情狀を等しくするも、筆を下せば形を殊にす。吟詠の規範は之を雅什に本づけ、流分・條散は、各おの言區を以

てす」に對應する。

『周書』王褒庾信傳論は、文學の本質について次のように述べる。

詩賦と奏議は軫(よこぎ)を異にし、銘誄と書論は塗を殊にすと雖も、其の指要を撮り、其の大抵を擧ぐれば、氣を以て主と爲し、文を以て意を傳うに若くは莫し。

『周書』は、ここで詩賦、奏議、銘誄、書論の四科をあげるが、このあげ方は、魏の曹丕の『典論』論文の「夫文本同而末異、蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗」の四文體をそのまま踏襲している。六朝期は文體論が盛行し、初唐までには西晋の陸機の「文賦」、摯虞の「文章流別志論」、李充の「翰林論」、梁の任昉の「文章緣起」、劉勰の『文心雕龍』、昭明太子の『文選』等、既に種々の文體論が提出されていたが、その中でも『周書』が奏議、書論、銘誄、詩賦の四科をとくに取り上げたのは、明らかに『典論』論文を念頭においてのことであった。

この段の『周書』の主張は、「以氣爲主、以文傳意」であるが、前句は同じく『典論』論文に「文以氣爲主」とある。後句は、宋の范曄の「獄中與諸甥姪書」に「常謂情志所託、故當以意爲主、以文傳意」とみえる。「文」は文彩、文辭で文章に修飾をほどこすこと。「意」は情意の義で、作者の思想・感情。この段は要するに、文學なる者は、各ジャンルによって種々に異なるものの、共通する本質的なものは、氣（個性的な氣力）を中心とし、文辭の修飾によって自己の思想・感情を傳えることだ、と主張するのである。ここで注意すべきことは、その主氣論の文學論ではなく、「言之無文、行而不遠」（左傳）というような傳統的な考え方に卽して、文辭の修飾に重要な意義を認めている事實である。

『周書』王褒庾信傳論は、つづいて具體的な文章創作法を說く。『周書』の創作方法は二段階論であるが、まず第一段階を次のように述べる。

其の殿最を考え、其の區域を定め、六經百氏の英華を撫り、屈宋卿雲の秘奥を探る。其の調は遠なるを尙び、其の旨は深きに在り、其の理は當しきを貴び、其の辭は巧みならんことを欲す。

ここは、構想を練り、文章の骨格をたてる段階。「考殿最」は、「文賦」に「殿最を錙銖に考え、去留を毫芒に定む」とあり、「定區域」は『文心雕龍』に「區域を圓鑒し、條を大判す……」とみえるが、ここでは言葉の撰定、配置を吟味、檢討するをいう。「撫六經百氏之英華、探屈宋卿雲之秘奥」は、「文賦」の「群言の瀝液を傾け、六藝の芳潤に漱ぐ」や、『南齊書』文學傳論の「自らを天機に委ね、之を史傳に參う」に相應し、古典を規範として發想、典故等を求めるをいう。『周書』のいう規範とすべき古典は、易・書・詩・禮・樂・春秋・諸子百家・屈原・宋玉・相如・揚雄と、より具體的である。その際、文章の調（おもむき）、旨（論旨）、理（論理）、辭（文飾）は、それぞれ遠く、深く、當しく、巧みであれと言う。このように構想をねり、文章の骨格をたてる第一段階の『周書』の方法は、取りたてて目新しくはなく、六朝の常識的な創作方法論にそのまま依據しているといえる。

文章創作の第二段階について『周書』は次のように述べる。

然る後に、金璧を瑩き芝蘭を播かば、文質は其の宜きに因り、繁約は其の變に適う。輕重を權衡し、古今を斟酌せば、和にして能く壯、麗にして能く典なり。煥たることは五色の章を成すが若く、紛たることは八音の繁會するが猶し。

ここは、辭句に音律・文彩の雕琢を加え、語句の輕重・古今を考量することについて。そうすれば、文・質、繁・約が調和し、和、壯、麗、典であることができると說く。「文質因其宜、繁約適其變」は、「文賦」に「豐約之裁、俯仰之形、因宜適變……」とあるのを意識しての表現と思われる。「權衡輕重、斟酌古今」は、『文心雕龍』鎔裁篇の「權衡損益、斟酌濃淡」の表現を借りた可能性が考えられる。「和而能壯」は、後述のように『典論』論文の「應場和而不壯」に敢えて反措定を置いた。「麗而能典」の「麗」「典」は六朝の常套語で、六朝期には兩立させることが困難だと認識されていた。ここではそれが可能だと說く。このように、辭句に雕琢をほどこす第二段階でも六朝文學論の延長にすぎぬが、初めに構想、骨格、典故など文章の內容をしっかり定め、而る後に、文章の形式美を追求する二段階式の文章創作法自體、既に六朝文學論のなかで何度も確認されてきたことである。例えば、范曄の「獄中與諸甥姪書」の次の一節、「常に託する所を謂えらく；故に當に意を以て主と爲し、文を以て意を傳うべし。意を以て主と爲せば、則ち其の旨必ず見はれ、文を以て意を傳うれば、則ち其の詞流れず。⇩然る後に其の芬芳を抽き、其の金石を振うのみ」また『文心雕龍』附會篇の、「必ず情志を以て神明と爲し、事義を骨髓と爲し、辭采を肌膚と爲し、宮商を聲氣と爲す。⇩然る後に玄黃を品藻し、金玉を摛べ振い、可を獻じ否を替り、以て厥の中を裁す」等がそうである。

ただ、自己の會心できる文章創作に非常に樂觀的である點が、『周書』は六朝文學論と異なる。『周書』は、文章創作法の最後を次の文句で結ぶ。

夫れ然らば則ち、魏文の所謂、通才のみ以て體を備うるに足らんや。士衡の所謂、能く以て意に逮ぶに足るこ

との難きや。

魏文とは魏の曹丕で、『典論』論文に「此の四科は同じからず。故に之を能くする者は偏するなり。唯だ通才のみ能く其の體を備う」と述べた。士衡は西晉の陸機で、「文賦」に「恒に患う：意の物に稱わず、文の意に逮ばざるを」と嘆いた。いずれも文章創作の困難さを述べたものであるが、この他にも范曄（「獄中與諸甥姪書」）や劉勰（『文心雕龍』神思篇）など、六朝文人はしばしばこれに言及した。しかし、『周書』はこうした發言に敢えて反抗し、自己の創作方法に從えば會心の作が可能であると說くのである。ここには、より高度な文學水準を飽くことなく追い求め、常に自力の及ばぬことを嘆く南朝の貴族的文人の面貌は見えず、方法如何の問題によって文章創作も可能とする樂觀的な新興階級の顏がのぞいている。

文學史の叙述部で、五胡十六國時代の文學狀況を『周書』は次のように說明する。

既にして中州版蕩し、戎狄交ごも侵し、僭僞相い屬（つら）なり、士民は塗炭す。故に文章は黜（しりぞ）けらる。其れ思いを戰爭の間に潛め、翰を鋒鏑の下に揮うこと、亦た往往にして間出せり。……然るに皆、倉卒に迫られ、戰爭に牽かる。竟（一作競）奏符檄は、則ち粲然として見る可きも、體物緣情は、則ち世に寂寥たり。其の才に優劣有るに非ず、時運の然らしむるなり。

ここで『周書』は、五胡十六國時代、章（竟）奏・符檄の實用文學が多く、緣情・體物の文藝作品が少ないのは、「戎狄が侵入し、僭僞がつづいた」という戰時狀態の社會的政治的條件（時運）のせいであり、決して時の作家に個人的才能の優劣があった爲ではないとする。これは、魏晉期に流行した、作者の中にある先天的な氣質・才能の違い

が文學の違いを作りだす、という才性論的發想とは對蹠的であり、『周書』のこうした觀點は、「毛詩大序」等既に古く儒家の文獻の中に見い出せる。しかしそれらは斷片的にすぎず、その觀點を深く掘り下げ、專論的に取り上げたのは、『文心雕龍』の時序篇である。『周書』は更に魏晉期の文學史を「時運推移、質文屢變」と叙述するとき、この時序篇の「時運交移、質文代變」をそのまま引用している。この事實にも示されているように、實は、六世紀の初頭既に劉勰が到達していたかかる觀點から、『周書』は五胡十六國時代の文學現象を解釋していたのである。

結び

以上から、初唐の歷史家の文論に六朝文學論の絶大なる影響があることが、おおうべくもない事實として明らかになったが(9)、從來、この事實に注目されることが殆どなかったため、今後、初唐文學思想史を再構成する際には、充分な考慮が拂われるべきだと思われる。

ところで、六朝文學論の影響とひと口に言っても、そこには注意すべき點がいくつかある。それはまず、その六朝文學論が、これまでの檢討から明らかなように、梁の簡文帝（五〇三―五一）や徐陵（五〇七―八三）らの文學放蕩論(10)のようなラジカルなものではなく、晉の陸機の「文賦」や梁の劉勰の『文心雕龍』等に代表される古典主義的な敎養的良識的な六朝文學論であったことである。この古典主義的六朝文學論は、宮體詩や徐庾體に代表されるような輕艶な梁陳文學を否定した初唐の歷史家達の文學史觀と前後相應ずる關係にある。

一方、初唐という時期は、南朝の例えば沈約の四聲八病說等をうけて、詩律學が盛行した時代でもあった。しか

し、ここで考察した初唐歷史家の六朝系文學論が、同じく六朝文學論の系譜にあるとはいえ、それらとは性質を異にするものであることも明らかである。前者は、對偶や聲律等の詩の格律に關し主に形式論の範疇に屬するが、後者は、主に詩文の原理、本質などの內容論の範疇に屬する。

歷史家の文論にみえる六朝的文學論が、この格律論等の文學の形式的諸理論でなかったことは、正史の文苑傳序という場の性格からして、さして不思議はないものの、それが文學放蕩論ではなく、「文賦」から『文心雕龍』等に連なるオーソドックスな良識的なそれであった事實は、いかなる意味を持つのであろうか。先にも觸れたように、『北齊書』や『周書』等は、梁末の簡文帝の宮體や徐陵・庾信らの淫麗な文學を否定したが、それは同時に、南朝から流入して唐初の詩文壇に流行していた宮體や徐庾體風の文學への批判でもあった。事實、太宗には「庾信の體に學ぶ」と題した詩があり、また嘗て戲れに艷詩を作ったこともある。しかし、それは虞世南によって、「聖作は工みと雖も、體製は雅に非ず。……爲國の利に非ず」（『唐會要』卷六五）と強く諫止された。このように唐初には、宮體や徐庾體等の淫麗な詩文が廣く流行していたと同時に、一方では、そうした政教に益のない文學への強い批判的風氣も存在していたのである。從って、宮體や徐庾體文學に批判的であった歷史家が、そうした文學の理論的表現である放蕩文學論を拒否したのは當然のことであった。そこには、文學放蕩論のような享樂主義的、文藝至上主義的文學論を敢えて拒否した歷史家達の選擇眼と強い批判意識が働いていたのである。

ところでその事實は唐初の歷史家の直前にある文學放蕩論を跳び越え、それより一時代以前の文學論を選擇したという點で復古的である。その復古は、文學放蕩論に比して、より儒教を根幹とした、より政治につながりやすい

線がでてきたことを意味する。こうした選擇の背景には、文學と政治の乖離狀況に反對し、文學が政教に資すべき存在であることを強く主張する、六朝貴族とは異質な隋唐の新興階層の抬頭があった。しかし、唐初の歷史家達は、後の古詩・古文運動におけるように、一擧に漢代儒學の文學論まで遡り、それに基づいた新しい文學理念の理論と論理で南朝の齊梁文學を批判する所までは行かなかった。歷史はまだそこまで熟していなかったのである。とはいえ、彼らの批判が、初唐の宮體や徐庾體流行の宮廷文壇に對して一定の實効ある打擊力を有したことも確かであった。

一方、歷史家は、文彩や音律美を重視する文學をもひとしなみに否定し去ることはなかった。當然ながら、唐初の歷史家の文論が襲った「文賦」や『文心雕龍』等の良識的文學論に卽應する限りでの、卽ち『文選』に代表されるような文學は許容されていた。ただ文飾や詩文の格律だけを追求し、ひいてはその文學的營爲を至上とする文學が否定されていた。換言すれば、文飾や音律美の追求は、政教への功用という點で枠づけられていたのである。從って逆に、政教に利するための文飾や音律美は大いに發揮されねばなかった。そこに、初唐に詩律學が盛行する一要因があったとも言えるし、それはまた初唐文學が修辭主義的な南朝文學の延長であった事實とも決して矛盾するものではなかったのである。

つまるところ、唐初の歷史家の文論にみた六朝的文學論は、いづれ古詩・古文運動の提起した文學論に取って代られ、亡びゆく運命にあった過渡的現象にすぎなかったとはいえ、こうした南朝文學の延長という唐初の文學狀況に最もよくフイットしたものだったのである。

（一九八〇・八・二）

註

（1）唐王朝創建後まもない七世紀前半は、中國史學史上最も史書編纂の盛んな時期の一つであり、このわずか三、四十年の間に數多くの前王朝の正史が完成した。左はその關係年表である。

武德四年（六二一）令狐德棻の上奏。
五年（六二二）六代史修撰の詔。
貞觀三年（六二九）五代史修撰の詔。
十年（六三六）五代史の完成。
一五年（六四一）五代史志修撰の詔。
二〇年（六四六）晉書修撰の詔。
二二年（六四八）晉書の完成。
顯慶元年（六五六）五代史志の完成。
四年（六五九）南北史の完成。

（2）魏徵の『隋書』のみは他の前代史とやや性格を異にするので、小論では取り上げなかった。『隋書』については、稿を改めて論ずるつもりである。しかしながら小論での結論は『隋書』についてもその大方は妥當する筈である。

また『南史』文學傳序、『北史』文苑傳序は、その殆どが『晉書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』の寄せ集めにすぎず、そのオリジナルの部分にもみるべき文論がないのでここでは割愛した。

（3）「文苑傳序」の作者は今日不明であるが、『晉書』を監修した房玄齡、褚遂良、許敬宗、及び實質的に編纂作業の中心となった令狐德棻の可能性が比較的強いと考えられる。

（4）松下忠『明清の三詩說』八二頁參照。

（5）後に張仁青氏『魏晉南北朝文學思想史』（中華民國六十七年十二月初版）も、その詩歌起源論に類似の說を展開していることを知った。張氏は詩歌起源論を、㈠唯心說、㈡唯物說、㈢心物二元說に分類する。私の〈心情→詩文〉の二段階說が㈠唯心說に、〈事物→心情→詩文〉の三段階說が㈡唯物說と㈢心物二元說とに對應する。張氏は、最初の規定的なものが、心か、物か、心物兩方か、による分類であり、私は、二段階か、三段階かの段階による分類である。また張氏には、後述するような各說が發展するという觀點は見られない。

（6）高木正一氏『鍾嶸詩品』は、上文を「氣→物→人（性情）→歌なる詩論を展開した」ものであり、「氣之動物」の部分は、「傳統的な詩論の中には見られなかっ

た鍾嶸獨自の創見」（三三頁）と位置づけておられ、これには私も深い示唆を受けた。しかし、同書には、漢代までの傳統的な〈事物→心情→詩文〉という單純な理論が、それぞれのステップで六朝期に深化發展したという觀點はないようである。

（7）『禮記』禮運篇には、「七情」の語や、人が「天地の心」「天地の德」「五行の端」「五行の秀氣」であることなどが見えるが、これらは間接的出典にすぎない。『禮記』の理論を文學論に取入れた『宋書』謝靈運傳論や『文心雕龍』等が直接の出典と考えられる。なお「六情」は、「文賦」に「及六情底滯、志往神留」とみえる。

（8）この論の作者は現在不明であるが、『舊唐書』岑文本傳（卷七〇）の、「其史論多出於文本」という記述からすると、岑文本の可能性が大きい。しかし、他にも『周書』を編纂した令狐德棻や崔仁師の可能性も考えられる。

（9）これまで私は唐初歷史家の文論と六朝文學論との連續面を强調してきたが、もちろん歷史家の文論が六朝文學一邊到であるわけではない。それと對立的な文學思想は、その功用主義的な文學觀、及び宮體や徐庾體等の六朝末期の淫麗文學否定の文學史觀とにまとめることができる。しかし、これについては從來からくり返し論じられているので、ここでは取り上げないことにする。

（10）林田愼之助氏『中國中世文學評論史』第五章第二節「南朝文學放蕩論の美意識」參照。

付記——小論の六朝文學論からの引用はすべて通行本によった。